

# 第 70 回カンヌ国際映画祭シネフォンダシオン部門参加報告

## 2017 Cinefondation Festival de Cannes Participation Report

月野木隆行\*<sup>1</sup> 山田朗\*<sup>1</sup>

Takayuki TSUKINOKI\*<sup>1</sup>, Akira YAMADA\*<sup>1</sup>

あらまし：コンテンツ教育学会第 1 回大会（2017 年 3 月）にて発表した卒業制作作品『溶ける』が、カンヌ国際映画祭シネフォンダシオン（学生映画）部門に招待された。我々はカンヌに赴き、世界の学生映画の現状を探った。  
キーワード：学生映画、カンヌ国際映画祭、シネフォンダシオン



### 1. はじめに

2017 年 5 月に開催された第 70 回カンヌ国際映画祭シネフォンダシオン部門に東放学園映画専門学校の 2015 年度卒業制作作品『溶ける』が招待された。監督をした井樫彩とともに同部門の作品上映、表彰式、レセプションに参加した。

・参加作品『溶ける』45 分

出演：道田里羽，ウトウウマ，小山梨奈ほか

監督・脚本：井樫彩

プロデューサー：川村尚寛

制作：阿久津祥乃

助監督・撮影：高野隼平

撮影：井野雅貴

助監督：水野愛

照明：仁藤咲，岩間瑠菜

録音：瀬能瑞生，山本睦，西岡竜希

美術：内田紫織

記録：高橋茉莉菜

編集：小林美優

ストーリー：家族や友人たちとの関係に苦悩する小さな町に住む女子高校生が、東京から来た親戚の男に刺激されつつも結局は町から離れられない自分に気づく...

また、本校の卒業制作については、コンテンツ教育学会第 1 回大会（2017 年 3 月）にて山田朗が発表した「専門学校における映像作品実習の考察」に詳しくあるので、省略する。

### 2. シネフォンダシオン参加までの経緯

『溶ける』は、2016 年に催された映画祭等で以下の賞を受賞し、各所で評価を得た。

①第 28 回東京学生映画祭 準グランプリ

②第 38 回びあフィルムフェスティバル 審査員特別賞

③第 4 回なら国際映画祭 N A R A - w a v e（学生部門）  
ゴールドデン KOJKA 賞

④第 34 回青い翼大賞 青い翼大賞（撮影・照明技術）学生部門グランプリ

⑤横濱インディペンデント・フィルム・フェスティバル（編部門）ジャック&ベティ賞

なかでも、なら国際映画祭はディレクターの河瀬直美監督の関係もあり、学生映画部門で優秀な作品はカンヌ国際映画祭のシネフォンダシオン部門に推薦されることになっていた。第 4 回なら国際映画祭の受賞作からは『溶ける』のほかにもう 1 作品の計 2 作品が推薦された。

2017 年 3 月に招待内定の通知があり、4 月 12 日に正式発表がなされた。

\*<sup>1</sup> 東放学園映画専門学校  
TOHOGAKUEN Film Techniques Training College

### 3. シネフォンダシオンとは

カンヌ国際映画祭にはおもに4つの部門がある。

- ①コンペティション部門
- ②ある視点部門
- ③短編部門
- ④シネフォンダシオン部門

その他、オープニング上映作品、監督週間、批評家週間などの上映がある。メインはコンペティション部門で、最高賞「パルム・ドール」を目指す。

シネフォンダシオン部門は1998年からスタートし、映画学校に所属している学生の作品を対象にしている。作品の時間制限は60分であるが、監督の年齢や経歴の制限はない。審査をおこない、第3席までに賞を贈る。第1席には15,000ユーロ、第2席には11,250ユーロ、第3席には7,500ユーロの賞金がそれぞれ贈られる。

以下、これまでにシネフォンダシオンに招待された日本の映画学校ないしは日本人監督の作品である。

1999年『夢二人形』山崎達彌（日本大学芸術学部）

2000年『犬を撃つ』木村有理子（映画美学校）

2001年『トシ君が生まれた日』吉川光（日本映画学校）

2002年『蘇州の猫』内田雅章（映画美学校）

2003年『人コロシの穴』池田千尋（映画美学校）

2004年『春雨ワンダフル』青木あゆみ（映画美学校）

2012年『理容師』秋野翔一（東京藝術大学）

2014年『ナイアガラ』早川千絵（ENBUゼミナール）

『Oh,Lucy!』平柳敦子（ニューヨーク大学大学院映画制作学科シンガポール校）

このなかでは、2014年の『Oh,Lucy!』が唯一第3席に入賞している。

### 4. 2017年シネフォンダシオンについて

映画祭自体は2017年5月17日～28日の12日間開催されたが、シネフォンダシオン部門は5月24日～26日の3日間で上映及び成績発表、レセプション（ディナー）がおこなわれた。2017年は世界より2,600本（626校）の応募作品があり、そのなかから14か国16作品が招待された。作品は、実写だけではなく、2本のアニメーション作品も含んでいる。

すべて「SALLE BUÑUEL」にて、4作品ずつを90分程度に4ブロックに分けて上映された。以下は招待された16作品の上映順のタイトル、監督名、学校名及び上映時間である。上映前に監督が登壇し、作品についてのコメントを述べる。また、上映順はランダムとのことであった。



シネフォンダシオン上映会場の SALLE BUÑEL

- ① “AFTERNOON CLOUDS” Payal KAPADIA  
FTII インド 13分
- ② “PAUL EST LÀ(Pual Is Here)” Valentina MAUREL  
INSAS ベルギー 24分
- ③ “HEYVAN(AniMal)” Bahman&Bahram ARK  
National school of Cinema イラン 15分
- ④ “LÀTHATATLANUL” Àron SZENTPÉTERI  
Szinház-és Filmművészeti Egyetem ハンガリー 32分
- ⑤ “LEJLA” Stijin BOUMA  
Sarajevo Film Academy ボスニア・ヘルツェゴビナ 22分
- ⑥ “BEN MAMSHICH” Yuval AHARONI  
Steve Tisch School of Film&Television,Tel Aviv University  
イスラエル 25分
- ⑦ “GIVE UP THE GHOST” Marian MATHIAS  
NYU TischSchool of the Arts アメリカ 13分
- ⑧ “ATRANTIDA,2003” Michal BLASKO  
FTF VSMU スロヴァキア 30分
- ⑨ “WILD HORSES” Rory STEWART  
NFTS イギリス 26分
- ⑩ “PEQUENO MANIFIESTO EN CONTRA DEL CINE  
SOLEMNE(Little Maifesto Against Solemn Cinema)”

Roberto PORTA FUC アルゼンチン 14分

⑪ “À PERDRE HALEINE(Breathless)” Léa KRAWCZYK

La Poudrière フランス 4分

⑫ “TOKERU” Aya IGASHI

Tohogakuen Film Techniques Training College 日本 45分



上映前の登壇。中央が井樫彩監督、右は通訳のリントン貴絵氏。

⑬ “VAZIO DO LADO DE FOR A” (Empty on the Outside)

Eduardo BP Universidade Federal Fluminense ブラジル 22分

⑭ “DEUX ÉGARÉS SONT MORTS(Two Youths Died)”

Tommaso USEBERTI La Fémis フランス 27分

⑮ “CAMOUFLAG” E Imge OZBILGE

KASK ベルギー 5分

⑯. “YIN SHIAN BIEN JIAN GON LU(Towards the Sun)”

WANG Yi-Ling National Taiwan University of the Arts

台湾 28分

また審査員長は、2007年『4カ月、3週と2日』でパルム・ドールを受賞しているクリスティアン・ムンジウ氏 (Christian Mungiu)。

他の審査員は、監督作品『ムーンライト』が2017年アカデミー賞作品賞を受賞したバリー・ジェンキンス氏(Barry Jenkins)のほか、クロティルド・エスム氏(Clotilde Hesme), アティナ・レイチェル・ツァンガリ氏(Athina Rachel Tsangari), エリック・クー氏(Eric Khoo)の全5名であった。なお、この5名は短編部門の審査員も兼ねている。

なら国際映画祭ディレクターの河瀬直美監督は昨年のシネフォウンダシオン部門、及び短編映画部門の審査委員長であり、2017年は監督作品『光』がコンペティション部門にノミネートされた。

## 5. 結果

審査の結果は5月26日に発表され、以下のとおりであった。

・第1席 (First Prize) :

“PAUL EST LÀ(Pual Is Here) Valentina MAUREL INSAS ベルギー

体臭を気にしている女の子の奇妙な性癖と、彼女以上に奇妙な同居人男性との関係を描く。



・第2席 (Second Prize) :

“HEYVAN(AniMal)” Bahman&Bahram ARK National school of Cinema イラン

ストーリー:ある男が羊の格好をして国境のフェンスを幾度も越えようとするという社会風刺コメディ。監督は双子の兄弟。



・第3席 (Third Prize) :

“DEUX ÉGARÉS SONT MORTS(Two Youths Died)” Tommaso USEBERTI La Fémis フランス

ストーリー:恋人の父親を殺した男が、その恋人と逃避行の末、心中を遂げるという話。



4 席以下の発表はなく、審査員からの講評はレセプションにて審査員より直接聞きなさいとのことであった。



レセプションにて審査員のバリー・ジェンキンス氏と井樫

## 6. 総括

『溶ける』が受賞を逃したことは残念であった。授賞式後のレセプション（ディナー）にて同席した各国の学校の教員達に訊いたところ、一様に「作品の時間が長い」ことが評価を下げた原因だと指摘された。シネフォンダシオン部門の規程では「60 分以内の作品」とあり、規程を守ってはいるが、アニメーションを除く他の作品が 15 分～30 分程度に収まっているので、長く感じさせたようである。他校（特に常連校）は、カンヌ映画祭のシネフォンダシオンに招待されることを作品制作の目標にしている感があり、そういったことを全く想定していない本校の作品は不利であったのかもしれない。ただ、「作品時間が長い」ということは審査員のバリー・ジェンキンス氏からも指摘があったので、作品の絶対的な時間ではなく、内容に比しての時間が長かったということも考えられる。

また、映画学校に通う学生は平均的に年齢が高いということを感じた。今回の招待作品もほとんどの作品が 30 代以上の学生監督によって撮られた作品であった。20 代の監督が少ないなかでも本校の作品の井樫監督は、映画祭当時まだ 22 歳と冏抜けて若かった。本校も系列校の中でも平均年齢が高いことから予想はしていたが、「映画を学ぶ学生は年齢が高い」という現実を改めて知らされた。バリー・ジェンキンス氏から「まだ若いのだからこれからチャンスはいくらでもある」との言葉をいただいたのがせめての慰めか。

また、カンヌはまさに「作家主義」であった。映画作家のステップとしてシネフォンダシオン部門が存在していることを認識した。すなわち、学生時代の監督作品がシネフォンダシオンに招待され、以降「短編映画部門」「批評家週間」など→「ある視点部門」→カメラ・ドール（新人監督賞）受賞→「コンペティション部門」→パルム・ドール（最高賞）獲得という道すじである。2014 年に『Oh,Lucy!』でシネフォンダシオン部門で第 3 席に入り、2017 年には同作品を自らリメイクし、批評家週間に出品した平柳敦子監督のようなステップアップも考えられる。また、映画祭事務局の方からは常に「カンヌは映画作家を育てる使命がある」というコメントを聞いた。いわゆる「カンヌに愛される」作家の創出である。日本映画界のひとつの展開として、「カンヌに愛される」ような映画作家を育成することも我々の教育目標のひとつであることを感じた。

今回のシネフォンダシオン部門の参加は、『溶ける』がなら国際映画祭で評価を得たことがきっかけとなった。なら国際映画祭（河瀬直美監督）とカンヌの関係性が存在していなければ、『溶ける』がカンヌに行くことはなかった。なら国際映画祭の推薦があればこそであり、全く推薦なしに 2,600 本もの作品の中から 16 本に残ることはできなかったであろう。しかし、『溶ける』は他のコンペティションでも評価を得ており、作品の出来栄は招待された他の 15 本と遜色がないように見えた。日本の学生作品を海外に向けて発信し展開させるには、今後も様々な可能性を積極的に見出し追求していく必要があることを痛感した。